

INFORMATION AND KNOWLEDGE NEWS

情報知識学会ニュースレター

1993 6.1

20

情報知識学会事務局 発行 〒101 東京都千代田区和泉町1番地(凸版印刷㈱内) TEL03(3835)5550 FAX03(3839)6061 ISSN0915 1133

知識の伝達と世代間格差

松田芳郎 (一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報センター)

知識と技術の世代間の継承というのは、なかなか難しいものである。近代社会になって職業選択の自由は中世的な家業の世襲性の崩壊をもたらし、従って徒弟修業であるとか、父子相伝といった伝承機構は、学校教育という言語を媒介とした大量教育の方式で代置出来るという幻想を人々にふりまくようになった。けれども、この学校教育体系を子細に見ていくと、そのなかに徒弟修業や父子相伝と同じように、常時生活を共にするということによる伝承機構を内包してきたことが判る。それは特に社会的エリートを養成する高等教育のなかに色濃く残っている。例えばイギリスのカレッジの寮システムは、新大陸のアメリカではアイヴィ大学のなかに名残りを留めている。ドイツ系の大学のなかにあるゼミナール制度もそれであり、これはナチに追われた亡命者の影響か、アメリカの大学院教育のなかに姿を変えて残っている。日本の理工学系の教室制や、社会科学系のゼミナール制(演習方式)などはこの変形とみることが出来る。文学部などの文学研究は、語学教育を除いては、そもそも、教室での大量教育は放棄しているといってもよいであろう。

このような寮生活・ゼミナール制などの教育方法の特徴は、言語表現では定式化しきれない研究方法の継承が最大の課題となる。文学教育以外は、理工学系の実験にせよ、社会科学の実証研究にせよ、共同研究というべきか、一人では研究が遂行できないという点に最大の特徴がある。研究方法の継承というときには、この共同研究の仕方(プロトコル)を習得することにある。近年の日本では、このような共同研究の実施が難しくなってきたといわれている。ある人は、1970年代の大学紛争による講座制の権威がなくなった事に理由を求めるかもしれない。だがどうも、原因はそこにはなさそうである。

最近の10年程の間に国立大学における大講座化・大部門化は、教授・助教授・講師・助手(複数)というピラミッド型から教授(複数)・助教授(少数)・助手(複数)という逆ピラミッド型への転換と理解されている。けれども、本当にこれによって問題が解決されるのであろうか。大講(次頁へ)

目次

知識の伝達と世代間格差	1	学会カレンダー	8
国際会議のご案内	2	英語コーパス研究会 発足	9
電子化辞書プロジェクト紹介	3	ニュースレター原稿募集	10
ニューロとGAによる、テキスト処理	6	平成4年度情報知識学会総会報告	11
情報知識学会通信	7		

座化の眼目は、複数教授の任用可能性によって、講座内の年齢構成の柔軟化にあるといわれている。確かにこれは一理のある考え方で、従来の講座制の様に、教授と助教授の間に20歳以上の歳の差というのは、講座内の年齢構成では合理的かもしれないが、共同研究の組織化という点では経験的には良くないようである。よく「雰囲気」であるとか「場の空気」とかいたり、さらにはもっと簡潔に「気」（かつて哲学者の中井正一が問題にしていた）と呼ばれるものを同時代人として呼吸することが、共同研究を実行するうえでの組織の調和を保つ上に不可欠のようである。どうも上下共に10歳以上の年齢差であるならば、ある若い同僚の表現を借りると「面従腹背でその場をしのいでおけばよい」ということになるようである。

それでは大講座で問題を解決するかというと、次の時点で同世代の人間の一斉交替という形を引き起しがちで、それだけでは問題解決にならないようである。いっそのこと医学部や一部の理工系大学で行われているように、助教授は同一組織のなかで昇任せずに、教授は常に外から招くという方式をとり、新しい教授が自分の所の助教授を任用するという方式をとったらどうなるであろうか。そうなると、助教授はアメリカのアソシエイト・プロフェッサーではなく、テニユアのないアシスタント・プロフェッサー相当になる。

いずれにせよ、教育組織としてではなく研究組織としての講座の編成方式というのは、もう少し色々と考えてみる必要がある。ところで、組織の柔軟性を図っていったときに講座の伝統と呼ばれている研究方法の継承性はどうかということが今一つの検討課題となる。例えば、特殊な主題のデータベースの編成を講座または教室単位で作ってきたとき、講座の教授の交替に即応して編成を続けていかれるのか否かといったことも、机上の議論では役に立たないことになる。

国 際 会 議 の ご 案 内

T M I ' 9 3

(The Fifth International Conference on Theoretical and
Methodological Issues in Machine Translation)

Time : July 14-16, 1993

Place: Kyoto International Community House

All inquiries should be directed to:

TMI '93 SECRETARIAT
c/o INS Corp. HS Bldg. 7-1-9 Nishi-gotanda
Shinagawa-ku, Tokyo 141 Japan
Tel: 03-3494-1869, Fax: 03-3495-2405

M T S u m m i t I V

Time : July 19-22, 1993

Place: Hotel Okura Kobe

All inquiries should be directed to:

MT SUMMIT IV SECRETARIAT
c/o AAMT, Akasaka Chuo Mansion 305
7-2-17, Akasaka
Minato-ku, Tokyo 107 Japan
Tel: 03-3479-4396, Fax: 03-3479-4895

電子化辞書プロジェクト紹介

横田 英司

三菱電機東部コンピュータ株式会社

(1993年3月31日まで、株式会社 日本電子化辞書研究所に出向)

1. はじめに

次世代の自然言語処理技術・知識情報処理技術を確立するために不可欠な大規模で高度な電子化辞書の研究開発を目的として、9年間のナショナルプロジェクトが1986年4月より始まった。そのために基盤技術促進センターと民間8社(注1)の共同出資により、株式会社日本電子化辞書研究所(Japan Electronic Dictionary Research Institute, Ltd. 略称EDR)が設立された。本稿により、このプロジェクトを紹介をさせていただく。

「電子化辞書」という言葉は、本プロジェクトにより作られた。電子化辞書とはCD-ROMやフロッピーディスクに入力された機械可読ないわゆる辞書とは異なり、機械翻訳や人工知能が扱う自然言語や、自然言語を理解するための背景にある知識を計算機処理に適した形式で表現したデータベースである。計算機が扱うという意味で「電子化」であり、おもに自然言語に関係した知識という意味で「辞書」と比喻した。

2. 辞書の構成と内容

EDR電子化辞書は単語辞書、概念辞書、共起辞書、対訳辞書の4種類の辞書とEDRコーパスから構成されている。(図1)

EDR電子化辞書

- | | | |
|------------|-------------------------------------|---|
| 1) 単語辞書 | a) 基本語辞書 | イ) 日本語基本語辞書(20万語)
ロ) 英語基本語辞書(20万語) |
| | b) 専門用語辞書 | イ) 日本語専門用語辞書(10万語)
ロ) 英語専門用語辞書(10万語) |
| 2) 概念辞書 | a) 概念体系(40万概念)
b) 概念記述(40万概念) | |
| 3) 共起辞書 | a) 日本語共起辞書(30万語)
b) 英語共起辞書(30万語) | |
| 4) 対訳辞書 | a) 日英対訳辞書(30万語)
b) 英日対訳辞書(30万語) | |
| 5) EDRコーパス | a) 日本語コーパス(25万文)
b) 英語コーパス(25万文) | |

図1 EDR電子化辞書の構成

・単語辞書

単語辞書は日常使用される語彙を扱った基本語辞書と、情報処理分野で使用される語彙を扱った専門用語辞書から構成されている。それぞれに対して日本語と英語辞書がある。

単語辞書には、自然言語処理する際に形態素レベルで必要となる見出し及び接続に関する情報（ある形態素がどの形態素と隣接する可能性があるかを示した情報）、構文レベルで必要となる文法に関する情報、意味レベルで必要となる語義分けのための識別子が格納されている。

・概念辞書

概念辞書は単語辞書で定義された40万概念についての知識が記述されたものであり、40万の概念識別子に対して人間が意味を把握できるように簡単な説明がなされ、概念体系と概念記述の2種類の情報が記述されている。

概念体系は概念を類似関係にもとづいた範疇に分類し、階層的に体系づけたものである。単語の言い替えや、シソーラスとして類似語の検索など様々な用途に利用できる。

概念記述はある概念が別の概念とどのような意味的な関係を取り得るかを、フィルモアの格関係に似た関係子で示した情報である。コーパスに実際に出現した個々の概念間の関係を示した情報と、コーパスや人間の内省にもとづいて概念の範疇（これは概念体系上で、上位に位置づけられる概念と解釈される）間の関係として示した情報の2種類がある。概念記述によって係受け関係の解析や、かな漢入力において適切に語を出力するためなどに役立つ。

・対訳辞書

対訳辞書は英語から日本語への英日対訳辞書と、日本語から英語への日英対訳辞書の2種類から構成されている。冊子体辞書では説明調の句や文あるいは例文などが用いられることがあるが、本辞書では機械処理に適切であるように訳語を用いている。

・共起辞書

共起辞書は日本語、英語それぞれの辞書から構成されている。共起辞書は言葉の言い回しに関する情報を示したもので、どの語とどの語の組み合わせが適切かの判定に用いられる。例えば、日本語では「存在する」という意味に対して「人」には「いる」を、「もの」には「ある」という単語を用いるなどの情報が示されている。

・EDRコーパス

EDRコーパスはEDR辞書の開発のために50万の例文を選択し解析したものであるが、自然言語処理などの研究のために役立つ。例文は出版物の発行部数を参考にして、新聞、雑誌、辞典、教科書などから選択したものであり、それぞれの文に対して形態素解析情報、構文解析情報、意味解析情報が示されている。

3. 運用支援システム

辞書本体以外に、これを利用するために便利なプログラムが提供される。ユーザがEDR辞書を容易に参照や修正したりするためにブラウジング・エディタがあり、ユーザ独自の応用システムにカスタマイズするために辞書アクセス用のライブラリがある。

ブラウジング・エディタによって単語の情報の表示や検索を行ったり、また概念を階層的に表示したり、意味関係をネットワーク状に表示して一覧することができる。さらに、コーパスに格納されている例文の構文関係を木構造で表示することもできる。

4. 辞書の形式

辞書は次の4つの形式で提供する予定である。また、それぞれの辞書形式を相互に変換するためのプログラムも提供する。

- ・EDR形式

EDR独自の形式であり、先に説明した運用支援システムが使用できる形式である。辞書情報がコンパクトに格納されているが、利用するためにはブラウジング・エディタなどのプログラムが必要である。

- ・ブレイン・テキスト形式

ユーザが手持ちのエディタで利用したり、独自の形式に変換する時に便利な形式である。辞書の内容すべてが読み取れる形式にダンプしてある。

- ・SGML形式

本学会でおなじみのSGML形式でも提供する。ブレイン・テキストに対して辞書構造と項目内容が明確になるようにタグづけしたものである。ブレイン・テキストと同様の利用の仕方ができる。

- ・RDB形式

リレイショナル・データベースとして使用されるようにテーブル形式で格納されたテキスト・ファイルである。任意のキーを用いて工夫しだいで様々な検索をすることができる。

5. おわりに

EDRプロジェクトは、当初の計画通り順調に進展しており、去る3月18日に成果発表を行った。約500名の参加者にはブラウジング・エディタを通して実際の辞書を見ていただき、EDR辞書の具体的な内容と開発状況を理解していただけたと思っている。また、単語見出しと概念見出しについては請求があれば実費で提供しており、既に国内にとどまらず多数利用していただいている。

現在、EDR電子化辞書の各辞書はさまざまな応用に適用可能な段階に達しているが、残りの2年間で実証評価を行い、より優れたものとするために改良・拡張を進めていく予定である。

付記

辞書の仕様説明書、研究レポート及び、辞書の入手方法などについては下記に問い合わせ下さい。

(株) 日本電子化辞書研究所

108 東京都港区三田1丁目4番28号 (三田国際ビル アネックス)

電話 (03) 3798-5521 (代表)

ファックス (03) 3798-5335

注1：富士通、日本電気、日立、シャープ、東芝、沖電気工業、三菱電機、松下電器産業

最近の用語や自動翻訳などの言語処理、テキスト処理に関係する大きな動きとしては、一つには先頃成果発表のなされたEDRによる電子化辞書の実現にみられるように、実世界志向の処理対象の大規模化、つまり大規模知識ベース(VLKB)が挙げられよう。もう一つにはこうした大規模なデータを処理するためのソフトウェア、ハードウェアの急速な進歩が挙げられる。我国ではニューロや光技術を基盤とする通産省の四次元コンピュータのプロジェクト(＜柔らかな情報処理＞)がある。一方目を海外にむけるとアメリカ政府による西暦2000年を見据えた＜グランド・チャレンジ＞の構想がある。本稿ではこれらの動きと筆者の関わりを若干述べてみたい。

まずVLKBについては、筆者は図書館における分類や情報検索の延長として、ここ数年引用(サイテーション)分析、ターミノロジー、機械可読テキスト等を研究してきた。これらの理論の紹介や、実際に用語、引用文献の調査や、OCPやTexas等のソフトを用いてテキスト検索なども試みた。分類やこれらの研究は電子化辞書等においても有効ではないかと思っている。1)

一方の＜柔らかな情報処理＞については最近チャンスに恵まれて、実験の段階ではあるがニューラルネット、GA(遺伝的アルゴリズム)の実システムを用いて感触を得ることができた。ニューロもGAも現在大変なブームとなっているがいずれも基礎研究がなされたのは古く1960年代に遡るとされている。また両者とも生体の仕組みに学んだもので、ニューロは脳の情報処理を、GAは遺伝子の集団進化をコンピュータ上にシミュレートしたものである。

さてニューロ(ニューラルネット)であるが実際に使ったのは米国Excalibur社で開発されたブール型パターン認識システムのSAVVYシステムである。micro VAX上で書誌データ、シソーラス(「分類語彙表」)、フルテキスト(Bible)等を検索した。SAVVYは生体の情報処理の研究を背景にしており、一層で構成され、教師なしの型である。このシステムのメインになっているのがAPRP(Adaptive Pattern Recognition Processor)というプロセッサである。そのプロセスを極く簡単にいうと、まず入力データ(文字列等)をパターン認識によって学習する。この学習においてはおもにAND、ORなどのブール演算により、自己組織的、適応的(adaptive)にネットを形成していく。またこの過程においてはシステムはパターン認識のための変数やルールを自動的に作成し、認識したデータの分類機構やサーチ機能をもっている。この最終的に形成(収束)されたネットワークへ、質問としての未知のデータ(検索語)を投入する。この際検索語もまたパターン認識され一種の点数表現(得点化)される。この検索語のパターンと類似のパターンをネットワーク上で並列探索し、検索語に近い得点順に結果(解答)を吐き出すというものである。こうした並列探索の結果、従来型の(プログラムと辞書によるexact match方式)に比べ数十倍の高速検索が可能となった。2)またこのシステムでは探索対象をすべてパターンでみており、文字列のほか株価やNMRなどのグラフ、分子の構造式の検索などもできる。また一般にニューロのadaptiveな自己組織的な振る舞いは何やら人間の直感に近いともいわれている。これはいわゆる発見的なデータ探索の期待を抱かせる。しかし逆に難点としてはこのシステムでは文字等の形のパターン認識を行なうのみでコトバの意味には全く関与しない。このため同義

語、類義語等の検索にはシソーラスをつけ加え
るとか、システムにコトバの概念処理の機能も
もたせなければならない。また検索する文字に
ユニーク性がない場合しばしばノイズを発生す
る。

一方最近いくつか応用例もみられるGAは、
単純なアルゴリズムで、離散・非線形問題など
定式化困難な問題に強いといわれており、また
大域的探索による解（準最適解）の多様性の保
持は発見的な探索につながるものとして期待さ
れている。またニューロとの関係では、ニュー
ロで得られた解（収束）をGAの初期解とみな
してGAとハイブリッドに用いる試みもある。
われわれもvisual Basicによる簡単なGAのシ
ステムを構築した。このシステムはwindowsが
あればパソコン上でも走る。GAの一般的な方
式に従い、問題の集団のサイズの決定、解候補
の遺伝子表現、1ポイント・クロスオーバー
（交叉）の採用、解のfitnessの決定等のプロセ
スにより＜用語の意味による分類（木構造作
成）システム＞を構築した。この結果用語が少
なかったため早期に収束したがGAによる解の
集団的進化を捉えることができた。3)

ニューロもGAも理論的にも多くの仮説を持
ち問題があり、実際面でもこれからというところ
である。しかし従来のノイマン型の処理を超
えた、より人間に近い情報処理の実現をめざし
ており、魅力的な研究分野といえよう。ついで
ながら理論的には既に免疫系、カオス系、技術
的にはバイオ・コンピュータ、超並列処理など
が実験、研究されている。これらの展開により
言語処理やテキスト解釈において一層の発見的
・創造的なチャレンジが期待されている。

参考文献

- 1) 岡谷 大：EDR電子化辞書とターミノ
ロジー、フルテキスト、サイテーション。
「語彙知識から世界知識へ」、日本
電子化辞書研究所、1992
- 2) 岡谷 大、荒井敏博：ニューラルネット
と情報検索。「第29回情報科学技術研
究集会論文集」日本科学技術情報セン
ター、1992
- 3) 岡谷 大、前沢 洋：GAと創造性—用
語の意味分類システムの構築—、「第
15回日本創造学会大会発表予稿集、
1993（投稿中）

情報知識学会通信

情報知識学会に入会を御希望の方は、このフォームをコピーして必要事項を御記入の上、事務局
に郵送、又はFaxでお送り下さい。折返し入会案内、入会申込書等の書類をお送り致します。
（現在入会金は1,000円、年会費は5,000円です。）なお現在ニューズレターがあります。御希望の
方はお知らせ下さい。

Fax: 03 (3839) 6061

〒101 東京都千代田区和泉1番地（凸版印刷内）

情報知識学会事務局 担当 齊藤 行

情報知識学会に入会したいので必要な書類をお送り下さい。

個人用 法人用 （どちらかを丸で囲んでください）

住 所：〒

（フリガナ）
氏 名：

電 話：

Fax：

学会カレンダー(Ver. 3.0, '93)

1993年6月4日～6日	Second Language International Conference, Teaching Translation and Interpreting -Insights, Aims, and Visions Contact: Cay Dollerup, Center for Translation and Lexicography, University of Copenhagen, 96 Njalsgade, DK 2300 Copenhagen S, Denmark, Fax: 45 32 961518
1993年6月16日～19日	ACH/ALLC '93 (The Joint Annual International Conference of the Association for Computing and the Humanities (ACH) and the Association for Literary and Linguistic Computing (ALLC), Georgetown University, Washington, D.C. Contact: Dr. Michael Neuman, Academic Computer Center, 238 Reiss Science Building, Georgetown University, Washington, D.C., 20057, U.S.A., E-mail: neuman@guvax.bitnet
1993年6月21日	Workshop on Intentionality and Structure in Discourse Relations, Ohio State University Contact: Owen Rambow, Dept. of Computer and Information Science, University of Pennsylvania, IRCS, Suite 400C, 3401 Walnut Str., Philadelphia, PA 19104, U.S.A., E-mail: rambow@unagi.cis.upenn.edu
1993年6月22日	Workshop on Very Large Corpora, Ohio State University Contact: Kenneth Ward Church, AT&T Bell Laboratories, 2b422, 600 Mountain Ave., Murray Hill, NJ 07974, U.S.A., E-mail: kwc@research.att.com
1993年6月22日～26日	ACL-93, 31st Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics, Ohio State University Contact: Don Walker, Bellcore, MRE 2A379, 445 South St., Box 1910, Morristown, NJ 07960-1910, E-mail: walker@bellcore.com
1993年6月28日～8月6日	1993 Linguistic Institute, Ohio State University Contact: Dept. of Linguistics, 222 Oxley Hall, Ohio State Univ., Columbus, OH 43210, E-mail: linginst@ling.ohio-state.edu
1993年6月29日～7月1日	Post Congress on Problems of Teaching Modern Hebrew, Jerusalem, Israel Contact: Ben-Zion Fischler, Council on the Teaching of Hebrew, POB 7413, Jerusalem, Israel
1993年8月1日～13日	The 2nd Summer Seminar of the Centre for Electronic Texts in the Humanities (CETH), New Brunswick, U.S.A. Contact: Summer Seminar 1993, CETH, 169 College Ave., New Brunswick, NJ 08903, U.S.A., E-mail: ceth@zodiac.rutgers.edu
1993年8月29日～9月3日	International Joint Conference on Artificial Intelligence '93, Chamberry, France
1993年9月8日～9日	International Library Technology Fair, Hatfield, U.K. Contact: Bill Forster, Office of the International Library, Technology Fair, University of Hertfordshire, Hatfield, Herts AL10 9AD, U.K.
1993年9月15日～17日	EUROCALL '93 (Emancipation Through Learning Technology, University of Hull, U.K. Contact: Mrs. June Thompson, CTI Centre for Modern Languages, University of Hull, Hull HU6 7RX, U.K., E-mail: eurocall@hull.ac.uk

英語コーパス研究会 (Japan Association for English Corpus Studies) 発足

大阪大学言語文化部 今井光規

英語コーパス研究会（会長：大阪大学齊藤俊雄教授）は、本年4月1日大阪大学言語文化部に事務局を置いて発足しました。コンピュータ利用の英語英文学研究の促進を目的とするこの会は、毎年2回の例会の開催、機関誌（『英語コーパス研究』）の発行、などをその主な事業とすることを会則に定めています。以下、幾つかの項目に分けて会の活動報告、今後の予定などとともに、入会のご案内を申し上げます。

1. 第1回例会報告

第1回例会は、去る4月3日（土）大阪大学で開催されました。3つの研究発表（赤野一郎・藤本和子「コーパスに見られる分詞構文」、西村秀夫「ヘルシンキコーパス—紹介と検索例」、丸谷満男「言語情報処理の教育について—追手門学院大学の事例」）と講演（中村純作「ヨーロッパにおける英語コーパス研究の動向」）が行われ、極めて活発な質疑応答がありました。

研究発表・講演への出席者は、北海道、関東、四国、九州からの方々を含め、56名の多数にのぼり、同じ会場で開かれた懇親会にも41名が参加され、楽しい雰囲気の中で情報交換ができて有益な時を過ごすことが出来ました。

2. 第2回例会について

会 場：神戸大学（瀧川記念学術交流会館）

開催期日：平成5年9月25日（土）

研究発表の募集：

メ 切：6月30日（水）事務局必着で発表題目をお知らせ下さい。そのさい研究内容または研究計画のレジュメ（400-800字）、および発表者の略歴を添えて下さい。研

究発表の採否は運営委員会で審議の後、7月中旬にご連絡いたします。

3. 機関誌の発行について

ただ今、機関誌（『英語コーパス研究』、英語書名は English Corpus Studies, 年1回発行）第1号の原稿（論文）を募集しています。ご入会のうえ、奮ってご応募下さい。

発行予定日：平成6年3月25日。

原稿メ切：平成5年9月15日（水）事務局必着。執筆ご予約の方は、6月30日までにその旨事務局までご連絡下さい。執筆要領をお送りいたします。

ご応募頂いた原稿は、編集委員会で審査の後、採否をご連絡いたします。

4. 入会のご案内

新規に入会をご希望の方は、郵便振替（大阪4-250586 英語コーパス研究会）で年会費をお送り下さい。郵便振替以外の方法による送金をご遠慮下さい。

年会費は4000円（学生3000円）です。郵便局に備え付けの振替用紙をご利用頂き、通信欄にお名前とご連絡先（もしよろしければ自宅住所、郵便番号、電話番号、所属なども）をお書き下さい。入会に関するお問い合わせは下記へお願いいたします。

5. 英語コーパス研究会のアドレス

〒560 豊中市待兼山町 大阪大学言語文化部 今井研究室; TEL: 06-844-1151 内線 5711 (今井) 5567 (齊藤); FAX: 06-845-5290 (FAXご利用の場合は、今井宛とご明記下さい)

ニューズレター原稿募集

1991年度より情報知識学会のニューズレターの発行が年6回になり鮮度の高いニュースを掲載しております。

つきましては会員の皆様の原稿を募集します。内容は自由自在、"情報"を題材にしたものから、"情報"に関係の無いもの迄、特に指定はありません。

なお現在電子編集を行っておりますので原稿はフロッピーでお送り下さい。また学会の研究会やセミナー等の案内については一部オフセット印刷を併用しております。ワープロ・A4サイズで出力されたものを、そのまま御郵送ください。いずれの場合も原稿の長さは2段組で1ページ20文字×40行×2段(1600文字)となります。段組なしの場合も1ページあたり1600文字を目安としてください。

これまで通り、以下の記事は常時募集します。執筆ご希望、又はどなたか推薦したい方など御紹介下さい。

巻頭言(タイトル込み 44文字×22行)

研究紹介、人物紹介

会員の随想、書評

学会のニュース・カレンダー

対談記事・インタビュー、学会出席報告

関連学会の開催案内、国際会議紹介

会社紹介・情報関係開発商品紹介

役に立たないミニ情報・役に立つミニ情報

**** なお執筆者は現在のところ会員に限りますので、記事を書きたい方は「情報知識学会」への入会をお奨め下さい。

**** 法人会員の広告も掲載致します。編集委員に御相談下さい。

**** 締め切りは変わりません。これまで同様、発行前の奇数月の20日です。

**** 下記の事項は必ずフロッピーと一緒に文書としてお送りください(フロッピーには書き込まないで下さい)。

掲載希望日： 第 号 年 月 日 発行

氏 名：

連絡先： 〒

Tel

Fax

問い合わせ・原稿送付先

〒167 東京都杉並区上荻4-4-5-101

長瀬 真理

Tel: 03(3395)8168、Fax: 03(3395)8608

平成4年度情報知識学会総会報告

平成5年5月20日
情報知識学会事務局

平成4年度情報知識学会決算書・予算案

1 平成4年4月1日から平成5年3月31日までの決算書

収入の部		支出の部		
収入科目	収入金額	部門	使用科目	使用金額
前年繰越金	1,935,399	ニューズレター	印刷代	1,348,277
会費収入	3,037,088	編集部	通信費等	0
利息	9,417	学会誌編集部	印刷代(未払)	1,000,000*
学会誌別刷代	108,497		編集経費	83,430
総会懇親会料	140,000		原稿料等(未払)	100,000*
慶弔金立替戻	5,000	企画部門	セミナー備品等	60,128
		総務部門	講師謝礼等	30,000
			F I D 準備費	0
		事務局・その他	会議用食事代	217,935
			事務用品代	29,644
			通信費	215,440
			印刷代(封筒等)	111,858
			振込手数料	5,356
			総会懇親会経費	145,160
			コデータ国際会議	100,000
			慶弔準備金	20,000
			交通費	2,490
			小計	3,469,718
合 計	5,235,401	予備金(次年度繰越金)		1,765,683
		合 計		5,235,401

2 平成5年度予算案

収入の部		支出の部		
収入科目	収入金額	部門	使用科目	使用金額
前年繰越金	1,765,683	ニューズレター	印刷代	1,500,000
会費収入*	2,600,000	編集部	編集経費等	50,000
利息	10,000	学会誌編集部	印刷代	1,000,000
学会誌別刷代	100,000		編集経費	100,000
懇親会参加料	100,000		原稿料	100,000
講演論文集代	70,000	企画部門	セミナー備品等	100,000
		研究報告会	講師謝礼等	50,000
			講演論文集印刷代	100,000
		総務部門	懇親会経費	70,000
			F I D 準備費	100,000
		事務局・その他	理事会実施費用	200,000
			事務用品代	50,000
			通信費	250,000
			印刷代(封筒等)	100,000
			振込手数料	10,000
			総会実施経費	100,000
			その他	5,000
		小計		3,885,000
合 計	4,645,683	予備金(次年度繰越金)		760,683
		合 計		4,645,683

* 会費収入は平成5年4月2日現在の会員数
より算定
個人会員 220名×@ 5,000=1,100,000
法人会員 19法人50口×@30,000=1,500,000
2,600,000

平成4年度 収 支 決 算

収 支 計 算 書				
平成4年4月1日から 平成5年3月31日まで (単位: 円)				
	予 算 額	決 算 額	差 異	
収 入 の 部				
1. 会 費 収 入	2,565,000	3,037,088	472,088	
法 人 会 員 会 費				
個 人 会 員 会 費				
2. 事業関係収入	0			
学 会 誌 別 刷 代		108,497	108,497	
セ ミ ナ ー 懇 親 会 料		140,000	140,000	
3. その他の収入	0			
雑 収 入		5,000	5,000	
預 金 金 利		9,417	9,417	
当 期 収 入 合 計 (A)	2,565,000	3,300,002	735,002	
前 年 繰 越 金	1,935,399	1,935,399	0	
収 入 合 計 (B)	4,500,399	5,235,401	735,002	
支 出 の 部				
1. ニューズレター編集部門				
印 刷 代	1,080,000	1,348,277	268,277	
通 信 費 等	48,000	0	- 48,000	
2. 学会誌編集部門				
印刷代(未払費用)	1,000,000	1,000,000	0	
編 集 経 費	100,000	83,430	- 16,570	
原稿料等(未払費用)	100,000	100,000	0	
3. 企画部門				
会 場 費	220,000	60,128	- 159,872	
講 師 謝 礼 等	200,000	30,000	- 170,000	
4. 総務部門				
F I D 準 備 費	100,000	0	- 100,000	
会 議 費	100,000	217,935	117,935	
5. 事務局・その他				
総 会 準 備 費	100,000	29,644	- 70,356	
通 信 費	100,000	215,440	115,440	
印刷代(封筒など)	140,000	111,858	- 28,142	
振 込 手 数 料	10,000	5,356	- 4,644	
総 会 懇 親 会 経 費	0	145,160	145,160	
コ デ ー タ 国 際 会 議 準 備	100,000	100,000	0	
慶 弔 準 備 金	0	20,000	20,000	
交 通 費	0	2,490	2,490	
次 年 繰 越 金 (予 備 費)	1,102,399	1,765,683	663,284	
当 期 支 出 合 計 (C)	4,500,399	5,235,401	735,002	
当 期 収 支 差 額 (A) - (C)	- 1,935,399	1,935,399	0	
次 期 繰 越 収 支 差 額 (B) - (C)	0	0	0	

貸 借 対 照 表		平成5年3月31日現在（単位：円）		
科 目	借 方	貸 方		
1 資 産 の 部 現 金 預 金	2,865,683			
2 負 債 の 部 未 払 費 用	0	1,100,000		
3 正 味 財 産 (内当期正味財産減少額)		1,765,683 (169,716)		
合 計	2,865,683	2,865,683		

平成5年5月20日
情報知識学会事務局

平成4年度総会報告事項

1 平成4年度事業報告

① 会 議

- ・平成4年 9月17日 16:00～17:00 総会実施 日本科学技術情報センター
- ・平成4年 4月23日 17:30～20:00 理事会 凸版印刷
- ・平成4年 6月16日 17:30～20:00 理事懇談会 凸版印刷
- ・平成4年 7月15日 18:00～20:00 理事懇談会 凸版印刷
- ・平成4年 8月 3日 18:00～20:00 理事懇談会 凸版印刷
- ・平成4年 9月17日 13:00～13:30 理事会 日本科学技術情報センター
- ・平成4年11月 4日 18:00～20:00 幹部懇談会 凸版印刷
- ・平成4年11月19日 18:00～20:00 理事会 凸版印刷
- ・平成4年12月10日 18:00～20:00 企画理事懇談会 凸版印刷
- ・平成4年12月22日 18:00～20:00 理事懇談会 凸版印刷

② 講演会・セミナー

- ・講演会「情報知識学のフロンティア」主催（9月17日実施）筑波大学藤原譲教授 出席者約40名
於日本科学技術情報センター
- ・シンポジウム「テキストデータベースの著作権」主催（12月10日実施）出席者 135名
於凸版印刷
- ・「1993年情報学シンポジウム」共催（平成5年1月実施）
- ・公開セミナー「地球規模の社会経済体制の変革期における社会科学文献情報検索の現状と未来」共催
（平成4年9月8日、11日 於国際文化会館講堂、京大附属図書館視聴覚講堂）
共催団体 一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報センター、ICS&D

- ・「材料設計の新しい方向に関する国際シンポジウム」共催（平成4年10月26日 於東大総合図書館会議室）
共催団体 文部省科研費国際共同研究、日本金属学会、先端材料技術協会、日本シミュレーション学会、形の科学会
- ・「情報化月間に関する勉強会（第249MCB研究会）」共催（平成4年10月）出席者 約20名
共催団体 日本システム工学会 於慶應義塾大学図書館
- ・「第1回人工物工学シンポジウム」協賛（平成4年11月26日、27日 於新宿センタービル52階会議室）
共催団体 文部省科学研究費新プログラム「工学を総合化する知的人工物に関する研究」グループ、東京大学人工物工学研究センター、その他11団体

③ 刊行物

- ・ニューズレター 13号 平成4年4月1日発行
- ・ニューズレター 14号 平成4年6月1日発行
- ・ニューズレター 15号 平成4年8月1日発行
- ・ニューズレター 16号 平成4年10月1日発行
- ・ニューズレター 17号 平成4年12月1日発行
- ・ニューズレター 18号 平成5年2月1日発行
- ・学会誌 3号発行予定

2 今年度事業計画

① 会 議

- ・平成5年5月22日（土）総会実施

② 講演会・セミナー

- ・第1回（1993年度）研究報告会実施（平成5年5月22日 於凸版印刷）
- ・「歴史研究と電算機利用ワークショップ」（平成5年9月実施予定）
- ・秋季セミナー（平成5年12月予定）
- ・「1994年情報学シンポジウム」共催予定
- ・その他各種フォーラム、セミナー開催予定

③ 刊行物

- ・ニューズレター 第19号～24号発行予定
- ・学会誌 第3号・第4号発行予定
- ・第1回（1993年度）研究報告会講演論文集発行

3 役員人事案

会 長	藤 原 鎮 男	東京大学名誉教授
副会長	藤 原 譲	筑波大学教授
	安 澤 秀 一	駿河台大学教授
	月見里 禮次郎	凸版印刷相談役
理 事	芦 崎 達 雄	日本科学技術情報センター
	有 川 節 夫	九州大学教授
	石 塚 英 弘	図書館情報大学教授
	岩 田 修 一	東京大学教授
	開 原 成 允	東京大学教授
	加 藤 嘉 則	藤倉電線所長
	黒 沢 慎 治	明光証券部長
	小 山 照 夫	学術情報センター助教授
	菅 原 秀 明	理化学研究所
	高 橋 靖 明	凸版印刷本部長
	田 隅 三 生	東京大学教授
	田 中 和 明	日立製作所
	次 田 皓	東京理科大学教授
	中 嶋 二 一	奈良大学教授
	中 山 堯	神奈川大学助教授
	長 瀬 真 理	城西国際大学助教授
	名 和 小太郎	新潟大学教授
	根 岸 正 光	学術情報センター教授
	藤 代 一 成	お茶の水女子大学助教授
	松 田 芳 郎	一橋大学教授
	三 浦 勲	紀伊國屋書店常務取締役
	武 笠 俊 介	大日本印刷株式会社副部長
	NECより1名	
監 事	穴 戸 駿太郎	国際大学学長
	米 田 幸 夫	東海大学教授

4 そ の 他

<会員数の件>

① 情報知識学会本体

	平成4年3月31日現在	平成5年3月31日現在	備 考
個 人			
個人	193人	215人	36人増14人減 計22人増
学生	2人	5人	3人増
賛助会員	20法人53口	19法人50口	2法人減1法人増 計1法人減 4口減 1口増 計3口減

② コデータ部会

	平成4年3月31日現在	平成5年3月31日現在	備 考
会 員	45人	42人	3人減

＜会計に関する補足事項 決算書の繰越金の状況＞

① 情報知識学会本体

- ・ 本学会の残高は、銀行口座、郵便振替口座2口座の3カ所に分けて管理されている。

平成5年3月31日現在の残高は

銀行口座	725,493円	}	合 計	2,865,683円
郵便振替口座①	1,116,180円			
郵便振替口座②	1,024,010円			

- ・ 決算書においては、次年度繰越金と未払いの会誌印刷代をあわせたものが残高である。

次年度繰越金	1,765,683円	}	合 計	2,865,683円
会誌印刷代未払	1,100,000円			

② コデータ部会

- ・ コデータ部会の平成5年3月31日現在の残高は、郵便振替口座の155,219円であった。

編 集 後 記 :

「ニューズレター」の原稿締め切り日は奇数月の20日です。奇数月は相撲の開催される月です。年6場所。ニューズレターも年6回発行。

だいたい編集の仕事は千秋楽頃から始まります。丁度平均16ページの紙面が星取り表にあたります。うまく紙面が埋まるように原稿を集めなければなりません。平均して2-3人の方には締め切り日をすっばかされます。相撲と同じで、全勝するのはとてもむづかしく、負けがこむと悲惨です。

どうか皆さん相撲の太鼓が聞こえてきたら「ニューズレター」の締め切日のことを思いだして下さい。(長瀬)